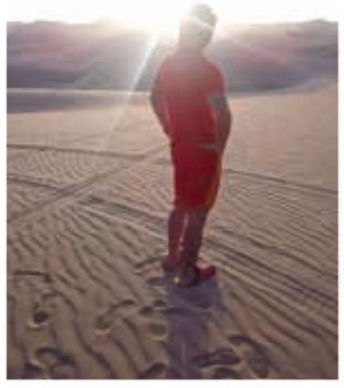

世界めぐり、経験積んで地域で生きる決心

株式会社　倉橋農林

倉橋 大亮 さん

くらはし・だいすけ

１９９３年田沢湖生まれ。高校卒業後、都内の企業に就職。プロレスラーや人力車夫など、さまざまな経験ののちに帰省。父、弟とともに家業の農林業に従事。仕事以外にもヘラクレスオオカブトの飼育や筋トレ、プロレス、アニメ、ラップバトル…と趣味も多彩。

がんばる人応援します ㊇

林業を継ぐために仙北市に戻った若者…というテーマで話をうかがうはずが、次から次へと異色の経歴が。人生、面白くなきゃもったいない。倉橋さんの生き方からそんな言葉が浮かんだ。【取材・文／坂本　佐穂】

アニメの夢がプロレスへ

「アニメが大好きで『京アニ（京都アニメーション）』に就職したかったんですよ」インタビューの最初から、想像もしなかった発言が飛び出した。

だが人生何が起こるかわからない。高校時代、幼なじみでもある親友に誘われて秋田市で開催されたプロレスの試合を見に行ったときのこと。

「どうせシナリオがあって勝敗も決まってて…と、ずっと剣道をやってきた自分としては、斜に構えて見てたんです。ところが実際に見たら衝撃でした。特に魅力を感じたのはマイクパフォーマンス。人を楽しませることに感動しました」

親友とともに目指したのは、何人ものプロレスラーを輩出している「アニマル浜口道場」。資金を貯めるため、レストランチェーンを全国展開する企業で5か月ほど働き、ついに入門。身体を鍛えるために人力車夫となり、浅草を訪れる観光客らを笑顔と元気な話術で楽しませてきた。

人生が変わった「船の旅」

浅草人力車夫時代。中央が倉橋さん。通算8年間車夫を続けた。

上京から3年、地元での成人式で親友から「子どもができたから結婚する」と告げられ大げんかに。プロレスでタッグを組み、二人でベルトを取ることを目指していた。夢に向かって頑張る未来が描けなくなった。

「裏切られた」。人力車を引いていても心は晴れず、お客さんを喜ばせることなどできなかった。仕事を休むことも増え、プロレスにも打ち込めない。悶々とし、落ち込む毎日。「うつ病」と診断された。

ある日、船で世界を巡る「ピースボート」の情報が舞い込んだ。何かが変わるかも。そう思った倉橋さんは118日間世界一周の旅に出た。22歳の時だった。

旅は想像をはるかに超えるものだった。「インドのスーク。商店街近くの衛生的とは言えない川で、大勢の人が洗濯をしていて。日本での満たされた生活と、ここに住む人たちの現実。カルチャーショックを受けました。それに、ペルーの砂漠で寝転んで見た満天の星。人生観が変わりました。自分はなんて小さいことに悩んでいたんだと」

帰国後、休んでいた練習も再開し、24歳でプロレスラーとしてデビューを果たした倉橋さんは親友に電話をかけた。

「『おめでとう』って言ってもらえた時に、自分はこの瞬間のために頑張ってエネルギーを使ってきたのだと気づきました。考え方もプラスになり、大きく前に進めたように思います」

ペルーの砂漠で

秋田で新たなチャレンジ

コロナ禍でプロレスの観客も浅草の観光客も激減。あきらめたのではなく、ひとつの夢を叶え、新たな人生を始める覚悟で2020年帰省。翌年4月から2年間、県が主催する林業大学校で弟とともに林業の知識や技術を学び、各種資格を取得して今年4月、父が経営する会社に就職した。

「毎日どろどろになるし、寒さ暑さとの闘い。その中に楽しさも学ぶこともあります。機械ではできないことがたくさんあって、人の手で山を育てていかなくてはなりません。例えば今力を入れている再造林。それがやがて地域や日本、地球のために大切なことにつながります。自分が従事することで林業の必要性や重要性が伝わるよう、培ったコミュニケーションや視野の広さを大切にして、地域に愛される大きな会社にすることに貢献したいと思っています」

他人に迷惑をかけないなら、どんなことがあっても夢を目指すべきと話す倉橋さん。30歳という若さで積み重ねた経験が活かされ、これからの人生がさらに豊かに面白くなるに違いない。地域とともに生きると決めた今、何度目かのスタートラインに立ったばかり。これからどんな方向に駆けてゆくのか見守りながら応援したい。

©DDTプロレスリング

プロレスラー時代の倉橋さん（左から3人目）